

北朝鮮のミサイル実験?により、地下鉄まで止めてしまう過剰反応ぶり…心配性なのは結構だが、現実の第一報は着弾のときであり、Jアラートには市民の安全を守る機能はない。気味の悪い警報音がトラウマになるだけだ。

そもそも、北朝鮮はコスト高の核兵器など日本に対し消費する気など毛頭ない。また、近未来、北が保有する核ミサイルを2発、撃ち込まれたとしても、日本という国土が亡くなることはない。どんなに悲惨な被害を受けようとも、不断の努力と我慢により、再興が可能であり、そういう意味において、「恐れるに足りない」わけだ。

2011年3月12日、15時36分、そして、3月14日11時01分、福島第一原発で発生した2回の大爆発：私は、恐怖や不安どころではない喪失的絶望感を初体験した。自分が死ぬ、家族が死ぬ、友人が死ぬ…

そんな恐怖を凌駕する「国土の消失」という絶望を垣間見たからだ。

当時、官邸がその大爆発を認知したのは、驚くことに発生1時間後のテレビ放送だった。時の首相は「戦後65年、最も厳しい危機」を国民に訴え、東日本の消失を真剣に覚悟した。「渋谷の放射線量は通常の1000倍、東京の水もヤバイぞ!」と、公知されない事実が永田町から伝え漏れると同時に、駐日大使館関係者、外資企業社員たちが続々と東京脱出を始めた。「本当の事が知らされ

『北の核など恐れるに足りない』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

ないのは日本人だけ」というのが政府関係者の本音であった。

官邸も自衛隊も知らない重大事すら、米軍はいち早く入手し、避難規模の分析に着手する。米国大使館から漏れる情報が全て一番的確なのは、笑うに笑えない。今、ソウル在住の米国人たちの静観を見れば、米朝衝突の真実も見えてこよう。「本当に重要な事は、日本人には知らされない」、これはある意味、安全保障の方程式だ。この方程式によれば、日本人が大騒ぎする北の核は、恐れるに足りない!という答えになるわけだ。

そして、本当に恐れるべきは「日本の核」であり、北の核実験を止めるよりも、日本の原発を止める方が優先事項なのだ。

廃炉への道は、先の見えない苦行のようなものだが、それでも10分の1以下までの縮小管理を今すぐ閣議決定すべきだろう。

地殻変動は人智を超えたエネルギーを炸裂させる。こんなに狭い国土の至る所にその源泉があり、大地震はいつでもどこで起きても不思議ではない。

今も危険な環境で保有している日本の核、敵国の核兵器より脅威なのは言うまでもない。重要なのは、「取り返しがつかない」という点だ。

憲法9条に必要なのは、戦争放棄という偽善ではなく、「原発依存の永久放棄」と「核の厳重管理」だ。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中